

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	Boon Kia Meng
論文題目	“No Time to Disperse...”: State Violence, Collective Memory and Political Subjects in the Time of Malaysia’s Bersih Protests (2011-12) (マレーシアのブルシ反政府運動期 (2011-12) の国家的暴力、集合的記憶、そして政治的主体性について)		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士論文は、マレーシアにおいて2011年から2012年にかけて発生したブルシ抗議運動 (清廉かつ公正な選挙を求める運動、以下、ブルシ11-12とする) と、この抗議運動に対する警察の対応に着目した。マレー人、華人、インド人を主たる民族とする多民族国家マレーシアにおいては、民族間の差異に着目する政治研究が多い。それに対して、本博士論文では、民族間の連帯に基づく参加型政治がブルシ11-12で見られたことに着目し、ブルシ11-12において既存のマレー人像を打ち破る政治的主体が誕生したこと、しかし、国家は警察を通して巧みに対応し、こうした抗議運動を弱体化させつつあることをヴァルター・ベンジャミンなどの理論を利用しつつ、実証的に分析した。</p> <p>第1章は、研究全体の構成について触れ、マレーシア政治におけるブルシ11-12の位置づけを明らかにしている。マレーシア政治研究は、与党連合が多民族国家で長期政権を樹立してきた点についての制度論的分析か、与党連合が常勝してきた選挙の分析に終始してきた。下からの民主化運動として極めて重要なブルシ11-12については、タローの社会運動理論を用いた研究は出始めているが、まだ十分ではない。本研究は、ブルシ11-12参加者たちの集合的経験・記憶、新たな政治的主体の台頭など、ブルシ11-12を理解する上では不可欠でありながら先行研究が看過してきた側面に着目しているとした。また、公的暴力装置である警察がブルシ11-12前後で抗議運動への対処方法を質的に変容させた点を分析の対象とした初めての論文であるとした。</p> <p>第2章は、ブルシ11-12参加者たちの催涙弾の経験・記憶を詳細に記述した。その集合的経験・記憶は、民族間の連帯の経験・記憶であると同時に、マレーシア国家による暴力行使とそれに対する人々の抵抗の歴史に位置づけられるとした。そして、この連続性、共通性を想起することで、民族間連帯に基づく人々の抵抗の記憶に依拠した歴史、公定史とは異なる歴史の記述が可能であるとも指摘している。</p> <p>第3章は、ブルシ11-12以後の警察の変容について分析している。公的暴力装置である警察は、とりわけ2011年7月の抗議運動に対して厳しい弾圧をしたことで国際的にも批判を浴びた。すると、マレーシア政府は、抗議運動・集会を一律に違法としていた治安維持法に代わる平和集会法を導入した。同法は、集会の自由の尊重と民主的権利を尊重し、条件付きで抗議運動も認めた。その結果、警察は平和集会法に則った「良</p>			

い」抗議運動を認めつつ、国家に非協力的な「悪い」抗議運動については合法的に暴力を使用して鎮圧するようになった。警察は、抗議運動に善悪の基準を持ち込むことで抗議運動の弱体化に成功していると指摘した。

第4章は、ブルシ11-12に台頭した新たな政治的主体を取り上げている。四人のマレーシア人活動家を取り上げ、ブルシ11-12において彼らが新たな政治的主体となった点に着目した。こうした政治的主体たちの言説と行動を踏まえ、ブルシ11-12は、国家による権威主義的な経済政策・近代化政策へからの民主的抵抗の政治の誕生と理解すべきだとしている。

第5章は、これまでの章の議論と知見をまとめ、今後の研究の方向性を示した。第3章で指摘したような、臨機応変に「下からの民主化」の芽を摘もうとするマレーシア国家の統治スタイルの歴史的な連続性についてのさらなる分析の必要性を指摘する一方で、民族間の連帯が見られた2012年4月の独立広場での抗議キャンプに触れ、マレーシア国家が提示する保守的かつ民族的分断を堅持する旧態依然としたマレーシア社会像以外の方向にマレーシア社会が変化していく可能性を示唆して本博士論文を終えている。